

WebGlider-X のプロジェクトを
WebGlider-X2 Editor で
編集する方法

1. はじめに.....	1
2. WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で編集する方法.....	2
2-1. WebGlider-X のプロジェクトを読み込む.....	2
2-2. WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor パッケージのプロジェクトの形式で保存する.....	3
2-3. その他.....	3
3. WebGlider-X と WebGlider-X2 Editor パッケージの違い.....	4
3-1. フォントについて.....	4
3-2. フォームについて.....	5
3-3. WBScript について.....	7
3-4. 内蔵データベースについて.....	8
3-5. その他.....	9

1. はじめに

WebGlider-X2 Editor では、WebGlider-X のプロジェクトを読み込むことが可能です。

しかし、WebGlider-X2 Editor パッケージと WebGlider-X ではスクリプトの仕様が変更されていますので、新しい環境で正しい動作をさせるためにプログラムを改修しなければならない場合があります。

また、画面仕様の違いにより、読み込んだ後画面の整形が必要になることがあります。

そのため、本ドキュメントで、WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で編集する方法について説明いたします。

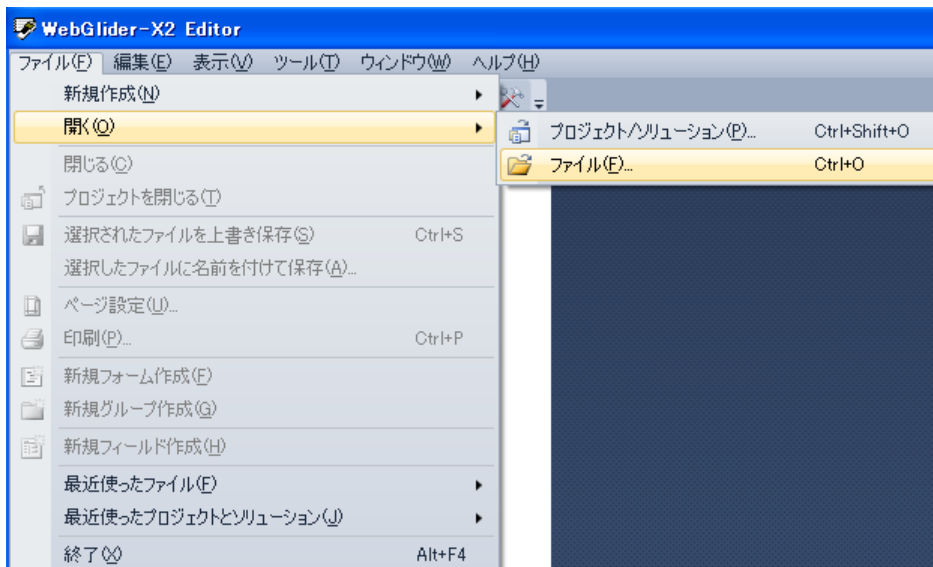
2. WebGLider-XのプロジェクトをWebGlider-X2 Editorで編集する方法

WebGlider-X2 Editor で WebGLider-X のプロジェクトを編集するためには以下の手順を行ってください。

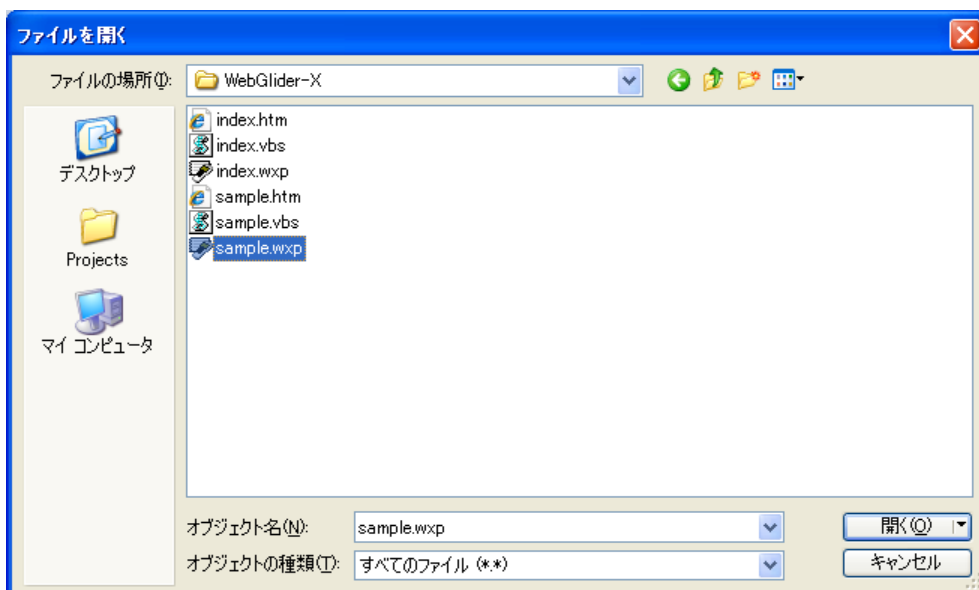
2-1. WebGLider-Xのプロジェクトを読み込む

WebGlider-X2 Editor で WebGLider-X のプロジェクトを読み込むには以下のようにしてください。

- ① WebGlider-X2 Editor を起動する
- ② ファイルメニューから「開く」→「ファイル」を選択する

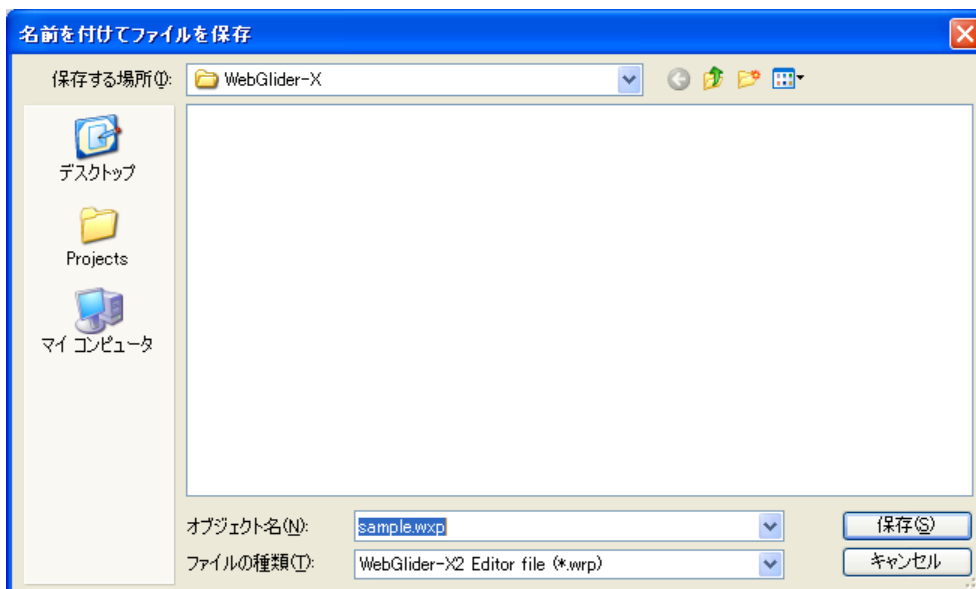
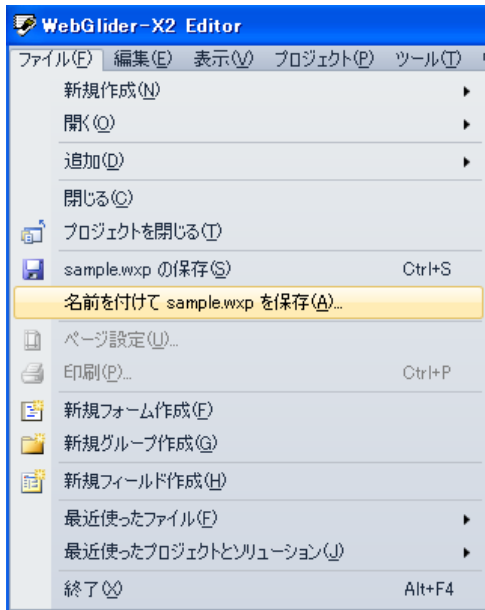


- ③ 「ファイルを開く」ダイアログで、開きたい wxp ファイルを選択し、「開く」ボタンを押すと読み込まれます。



2-2. WebGLider-XのプロジェクトをWebGlider-X2 Editorパッケージのプロジェクトの形式で保存する
読み込んだプロジェクトを WebGlider-X2 Editor パッケージのプロジェクトの形式で保存するには以下のようにしてください。

① ファイルメニューから「名前を付けて XXX を保存」を選択する。



② 「名前を付けてファイルを保存」ダイアログでオブジェクト名の拡張子を wrp にして「保存」ボタンを押すと WebGlider-X2 Editor パッケージのプロジェクトの形式で保存することができます。

2-3. その他

「3. WebGLider-X と WebGlider-X2 Editor パッケージの違い」をご確認の上、他に変更すべき箇所があれば変更してください。

また、必ず Emulator 及び実機での稼働確認を行うようお願いいたします。

3. WebGLider-XとWebGlider-X2 Editorパッケージの違い

WebGlider-X と WebGlider-X2 Editor パッケージの大まかな違いを以下に記述します。

	WebGlider-X	WebGlider-X2 Editor パッケージ
フォント	12ドットフォント、16ドットフォントが存在する	16ドットフォント、24ドットフォント、30ドットフォントが存在する
フォーム	CUI(Character User Interface)ベース	GUI(Graphical User Interface)ベース
WBScript	基本的なステートメントや関数をサポート	WebGlider-X に比較して内容が大幅に充実
内蔵データベース	SQLite V2.8.14(2004.6.9 リリース)	SQLite V3.6.23.1(2010.3.30 リリース)

※それぞれの詳細については以下の項目で説明します。

3-1. フォントについて

WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で読み込んだ場合、以下のフォントが使用されます。

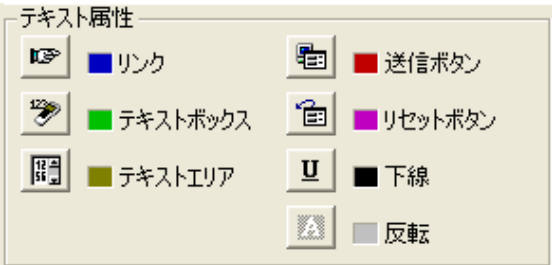












WebGlider-X で使用されているフォント	WebGlider-X2 Editor で使用されるフォント
12ドットフォント	24ドットフォント
16ドットフォント	30ドットフォント

※WebGlider-X2 Editor パッケージのフォントの詳細については、

WebGlider-X2 のヘルプ:[エディタ]→[フォームの編集]→[デザインビュー]
をご参照ください。

3-2. フォームについて

フォーム上に配置するオブジェクトですが、以下の違いがあります。

WebGlider-X	WebGlider-X2 Editor パッケージ
<p>スタティックテキストにテキスト属性を付加するだけで、簡単な画面しか作成できません。</p>  <p>※操作方法の詳細については、 WebGlider-X のヘルプ: [エディタ]→[フォームの編集] をご参照ください。</p>	<p>ツールボックスからオブジェクトを配置します。 オブジェクトは枠線、マージンを持ち、グラフィカルな画面が作成できます。</p> <ul style="list-style-type: none">  ボタン  リセットボタン  送信ボタン  テキストボックス  枠なしテキストボックス  パスワード  チェックボックス  ラジオボタン  テキストエリア  枠なしテキストエリア  イメージ <p>また、スタティックテキストにはツールバーから以下の属性を付加できます。</p>  <p>※操作方法の詳細については、 WebGlider-X2 のヘルプ: [エディタ]→[フォームの編集] [エディタ]→[操作方法] をご参照ください。</p>

WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で読み込む場合、以下の点にご注意ください。

- ① WebGlider-X では複数行に渡るテキストボックスを作成できましたが、WebGlider-X2 Editor パッケージではテキストボックスは1行のものしか作成できません。どうしても複数行にする必要がある場合はテキストエリアに変更してください。(変更方法は3-2-1. テキストボックスが複数行だった場合の変更方法をご参照ください。)
- ② WebGlider-X のフォームのプロパティ「背景ビットマップ」は、WebGlider-X2 Editor パッケージではサポートされませんので、ご使用されている場合は削除してください。
- ③ WebGlider-X のテキスト属性「反転」は、WebGlider-X2 Editor パッケージでは背景色: 黒、文字色: 白で表現されます。

3-3. WBScriptについて

WBScript で変更になった点として、以下の項目があります。

3-3-1. データ型の内部形式

WebGlider-X では整数しか扱えなかったのですが、WebGlider-X2 Editor パッケージでは小数も扱えるようになりました。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ] → [クライアントサイドスクリプト仕様] → [データ型]

WebGlider-X2: [エディタ] → [クライアントスクリプト仕様] → [データ型]

3-3-2. 変数

WebGlider-X ではグローバル変数のみしか使えませんでした。WebGlider-X2 Editor パッケージではプロシージャ内だけで有効なローカル変数も使えるようになりました。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ] → [クライアントサイドスクリプト仕様] → [変数]

WebGlider-X2: [エディタ] → [クライアントスクリプト仕様] → [変数]

3-3-3. 演算子

WebGlider-X2 Editor パッケージではいくつか演算子が増えています。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ] → [クライアントサイドスクリプト仕様] → [演算子]

WebGlider-X2: [エディタ] → [クライアントスクリプト仕様] → [演算子]

WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で読み込む場合、以下の点にご注意ください。

WebGlider-X2 Editor パッケージでは小数が扱えるようになった関係で、除算演算子「/」が、本来の浮動小数点数で商を求める演算子になりました。整数で商を求めたい場合は「¥」に置き換える必要があります。

3-3-4. ステートメント

WebGlider-X2 Editor パッケージではいくつかステートメントが増えています。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ] → [クライアントサイドスクリプト仕様] → [ステートメント]

WebGlider-X2: [エディタ] → [クライアントスクリプト仕様] → [ステートメント]

WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で読み込む場合、以下の点にご注意ください。

ステートメントはキーワードですので、ステートメントと同じ名前ものを WebGlider-X のプロジェクトで変数として使っていた場合、WebGlider-X2 Editor パッケージではエラーになります。別の名前に変えるか□で囲んでください。

※□で囲む件については以下のヘルプをご参照ください。

WebGlider-X2: [エディタ] → [クライアントスクリプト仕様] → [変数]

3-3-5. プロシージャ

WebGlider-X2 Editor パッケージでは、Function が使えるようになりました。また、引数も使用できます。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ] → [クライアントサイドスクリプト仕様] → [プロシージャ]

WebGlider-X2: [エディタ] → [クライアントスクリプト仕様] → [プロシージャ]

3-3-6. 関数

WebGlider-X2 Editor パッケージでは使用できる関数が大幅に増えています。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ]→[クライアントサイドスクリプト仕様]→[関数]

WebGlider-X2: [エディタ]→[クライアントスクリプト仕様]→[関数]

3-4. 内蔵データベースについて

内蔵データベース「SQLite」のバージョンが、V2.8.14(2004.6.9 リリース)から V3.6.23.1(2010.3.30 リリース)に上がりました。

※詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ]→[クライアントサイドスクリプト仕様]→[内蔵データベース]

WebGlider-X2: [エディタ]→[クライアントスクリプト仕様]→[内蔵データベース]

WebGlider-X のプロジェクトを WebGlider-X2 Editor で読み込む場合、以下の点にご注意ください。

WebGlider-X の、System オブジェクトの [OpenDBConnection](#) メソッドは、System オブジェクトの [OpenSQLite3Connection](#) メソッドに置き換えてください。(そのまま使用してもエラーにはならず、V2.8.14 に接続されますが、[OpenDBConnection](#) メソッドは将来的にはサポートされなくなります。)

[OpenSQLite3Connection](#) メソッドの詳細については、以下のヘルプをご参照ください。

WebGlider-X2: [エディタ]→[クライアントスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[System オブジェクト]

3-5. その他

その他、細かい違いとして以下のものがあげられます。
必要に応じて変更してください。

3-5-1. System オブジェクトの Print メソッドについて

WebGlider-X2 Editor パッケージでは桁や行の概念がないため、System オブジェクトの Print メソッドがサポートされません。使用した場合、画面左上に指定した文字列が強制的に描画されます。エスケープシーケンスを含む文字列や制御コードを指定していた場合はそのまま表示されます。(改行もされません。)

System.Execute にて “STATUSTEXT” コマンドを使ってステータス行のテキスト表示エリアに表示するか、メッセージ用のオブジェクトを新たに追加するなどしてご対応ください。

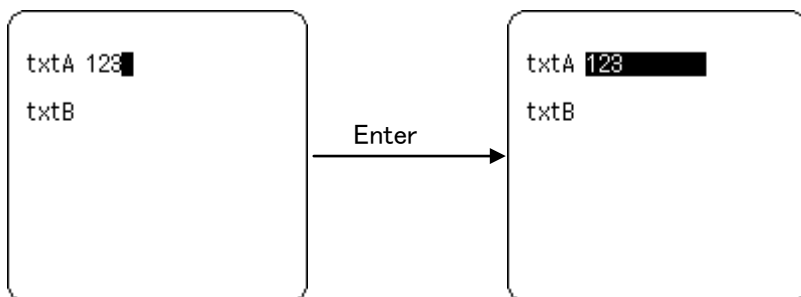
3-5-2. OnEnter イベント内で Browser.Cancel = True と記述したときの動作について

WebGlider-X では編集状態が解除されていましたが、WebGlider-X2 Editor パッケージでは編集状態は解除されません。

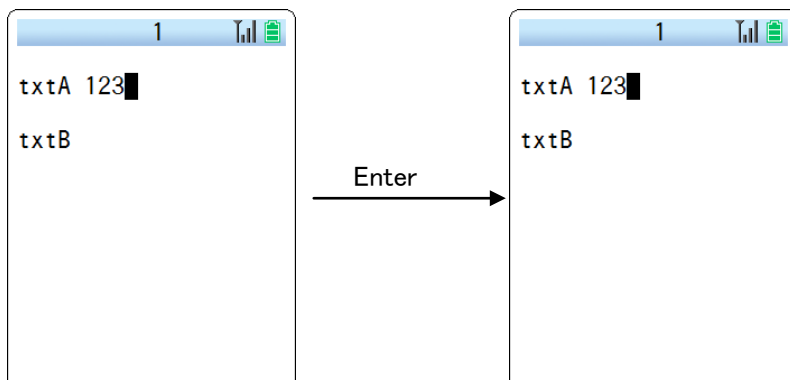
例) スクリプトで以下のように記述していた場合の動作

```
Sub form1_txtA_OnEnter()  
    Browser.Cancel = True  
End Sub
```

WebGlider-X



WebGlider-X2 Editor パッケージ



3-5-3. System オブジェクトの Backlight メソッド及び SetBacklightKey について

XIT-100 シリーズにはバックライトの ON/OFF がありますが、XIT-200 シリーズではバックライトの ON/OFF はありません。そのため、System オブジェクトの Backlight メソッドの仕様が変更になりました。また、それに伴い、SetBacklightKey メソッドはサポートされなくなりました。

System オブジェクトの Backlight メソッドをそのまま使用し、mode に 0 を指定していた場合は最低輝度、1 を指定していた場合は低輝度になります。点灯時間、消灯時間、繰り返し回数は無視されますので指定時間後に輝度の変更は行われません。

また、SetBacklightKey メソッドを使用した場合、何も処理が行われません。

Backlight メソッドの詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ]→[クライアントサイドスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[System オブジェクト]

WebGlider-X2: [エディタ]→[クライアントスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[System オブジェクト]

3-5-4. Null, Empty, 空文字列について

WebGlider-X では、Null、Empty、空文字列の区別がありませんでした。しかし、WebGlider-X2 Editor パッケージでは区別されます。

Form オブジェクトの GetSymbolID メソッドは、本来は空文字列を返すものでしたが、WebGlider-X では区別されないため Null を返していました。しかし、WebGlider-X2 Editor パッケージでは本来の空文字列を返します。

GetSymbolID メソッドの詳細については、以下の各ヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ]→[クライアントサイドスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[Form オブジェクト]

WebGlider-X2: [エディタ]→[クライアントスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[Form オブジェクト]

3-5-5. Gen2RW オブジェクトについて

(1) Channel プロパティ

XIT-160 では周波数チャンネルは単独指定していました。しかし、XIT-260 では複数指定できるようになったため、プロパティが変更になりました。

Channel プロパティではなく、Channels プロパティをご使用ください。(現在は Channel プロパティを使用してもエラーにはなりません、将来的にはサポートされなくなります。)

(2) Modulation プロパティ

XIT-260 で変調方式として設定できるのは「ミラーサブキャリア(4分周)」のみのため、WebGlider-X で Modulation を使用されていた場合は削除してください。(Modulation に 2 以外の値が設定してあった場合はエラーになります。)

(3) DataRate プロパティ

XIT-260 で通信速度として設定できるのは「160kbps」のみのため、WebGlider-X で DataRate を使用されていた場合は削除してください。(DataRate に 2 以外の値が設定してあった場合はエラーになります。)

(4) Power プロパティ

XIT-160 と XIT-260 では無線出力として設定できる値が異なっていますので値を変更してください。

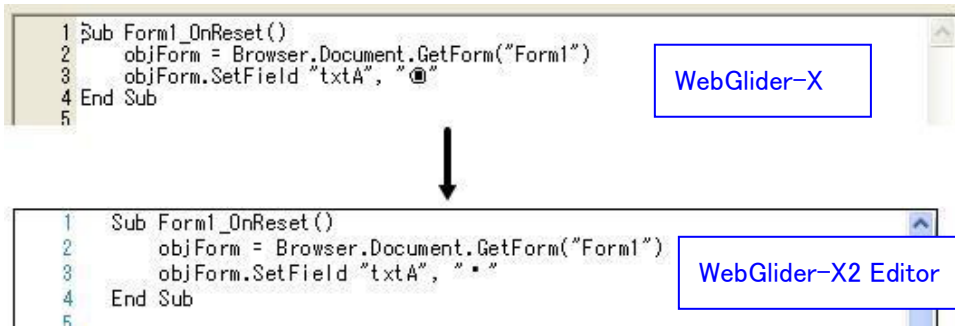
Gen2RW オブジェクトの詳細については、以下のヘルプをご参照ください。

WebGlider-X: [エディタ]→[クライアントサイドスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[Gen2RW オブジェクト]

WebGlider-X2: [エディタ]→[クライアントスクリプト仕様]→[ブラウザオブジェクト]→[Gen2RW オブジェクト]

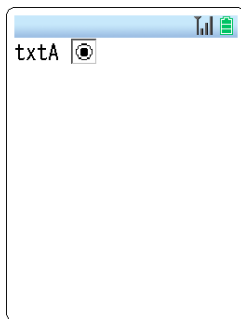
3-5-6. サーバースクリプト、クライアントスクリプトで外字を使用されていた場合について

WebGlider-X, WebGlider-X2 Editor パッケージに付属している拡張外字フォントをスクリプトでそのまま記述されていた場合、WebGlider-X2 Editor では表示することができません。

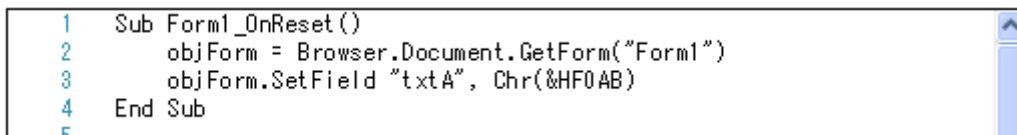


ただし、見た目として表示されないだけで内部ではきちんとデータを持っているので、スクリプトを実行した結果は正常に表示されます。

※上記を WebGlider-X2 Emulator で実行した結果です。



スクリプト上の文字が表示されないことが気になる場合は、文字をそのまま記述するのではなく以下のように文字コードで記述してください。



※WebGlider-X のスクリプト上で修正した後、WebGlider-X2 Editor で開く、という手順で行うと修正時に文字が見えるため修正しやすいです。

3-5-7. ショートカットキーについて

ショートカットキーに割り当てていてもショートカットキーとして機能しないことがありますのでご注意ください。

例えば、SF キーはテキストボックスでシフトロックの状態及び入力モードの切り替えに使われますので、編集可能なテキストボックス上にフォーカスがある場合はショートカットキーとしては機能しません。

また、F5/F6/F7/F8 キー、ENT キー、C キー、BS キーはテキストボックスの編集中には移動、確定、クリア、削除のキーとして使われますので、テキストボックスの編集中の場合はショートカットキーとしては機能しません。

ヘルプもご参照ください。

WebGlider-X2: [エディタ] → [操作方法] → [ショートカット]

以上